
魔法世界ネギま！～異端の精霊術師～

卵黄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界ネギま！〜異端の精霊術師〜

【Nコード】

N9479X

【作者名】

卵黄

【あらすじ】

神様の気紛れでネギま！の世界に転生することになった主人公はチートを手は何をなすのか

こちらで投稿されている小説を読んでいる内に自分でも書きたい欲求に駆られ執筆することになりました。

ド素人の自己満足の為の小説でお目汚しかと思いますがよろしくお
願いします。

第0話 プロローグ

「トラックに跳ねられた覚えも無ければ特別不運だった訳でもないんだがな……書類に珈琲でもこぼしたか？」

何もない、否、辺り一面白で埋め尽くされた空間に男が二人、1人は先程声を発した見た目20代前半の男で、もう1人は杖を持ち白い髭を伸ばした仙人の様な外見の老人

「やけに平然としとるの」

問われた老人は呆れと驚きが混ざった声音で続ける

「さっきの質問じゃが、お主が言ったどれでもない、なんとなく下界を見ておったら目についたんで、お主らの間で流行ってる転生と言っやつをしてみようかと思つてのう」

「これでもテンパってるんだけど……まあ、理由はわかったし転生するのも構わないんだが、流行りに乗って転生させるんだから、世界の指定とチートはありだよな？」

「これっぽっちもテンパっているようにみえんがのう。もちろん、どんな世界でもいいし、チートも当然ありじゃな」

「それなら、世界は魔法先生ネギま！で時期は魔法世界で紅き翼が活躍する大戦の5年前、場所はヘラス帝国の首都、大戦の1年前にはテオドラ第三皇女と皇帝の信用を得られるイベントを用意して欲しい」

「随分と細かいのう、ところで、なぜ5年前なんじゃ？1年前にイベントを起こすならその時でもいいじゃろうに」

男の細かい要求に若干嫌そうな顔をしながらも老人は浮かんだ疑問をぶつける

「なに、今から要求するチートに慣れるための時間が欲しいからなるほどのう、それでチートはどうするんじゃ？」

「風の聖痕の八神和馬の氣や中国拳法の技量と風の精霊王の力を常時使えるようにしてほしいのと、八神和馬の師匠の仙人の能力と技後は炎の精霊王の力を常時使用できるようにと閻属性の魔法の適正才能、『閻の魔法』を使用しても堕ちない体、圧倒的な魔力量、ああ、炎雷覇と虚空閃を、炎雷覇は日本刀の形で欲しい」

「欲張りな奴じゃのう、まあ、勝手に転生させるんじゃし構わんのだがの」

「自分で選んだ世界とはいえチートなしで生き残れる気が全くないからな。あ、武術全般の才能も欲しい。炎雷覇と虚空閃を持っても使えないんじゃ意味がないしな」

「確かにあの世界じゃといくら力があっても足りないそうじゃしな。要求がもうないなら跳ばそうと思うんじゃが、もうなにもないかのう？」

男の言葉に納得すると確認をする老人に思い出したように男が口を開く

「ああ、後は見た目を良くして欲しいのと、原作が開始した年度の2-Aに男として転校できるようにして欲しいくらいかな」

「ふむ、了解じゃよ。それでは今から向こうに送るとしようかの。」

「それじゃあ、機会が合ったらまた会おう。神様」

「そんな機会があればまた会えるのを楽しみにしておるぞ。神風奏」

老人の言葉を最後に白い空間はなくなり、神風 奏と呼ばれた男は魔法世界の地に降り立った。

第1話

奏が目を開け、周りを見回すと褐色に猫耳が生えた女性や虎の頭をした男性が普通に歩いていたり、空には人や船が浮いていたり現実にはあり得ない光景が広がっていた。

「この光景がこれからの常識になるのか……でも、その前にこの体に慣れないとな」

小さく呟き、左右で色の違う、澄んだ蒼と深い緋色の目を閉じたかと思っただけで閉じた目を開き魔法を使わずに飛び発った。

〈奏side〉

自分の体だけで飛ぶのは水の中に居るのに近い感覚なんだな。

この感覚も含めて慣れていけないといけないのか。

「っと、この辺りでいいかな、周りに人もいないし」

こんな、木しかない場所に長く居たくはないしさつさと力の制御をできるようにしないと……幸い、飲まず食わずでも生きていける体みたいだし、精霊を感じる事もできてから精霊術に関しては起こしたい現象に対してどれだけの精霊に頼めばいいかを感覚的に覚えるだけで良さそうだしな。

さつきは適当に呼び寄せたからとんでもない速度が出てたからなあ。

とりあえず、風術、炎術、中国拳法、剣術、槍術、陰陽術、仙術の

順に試していくか。

なんて考えてたのも一月前か。

まさか、ここまでチートとはなあ、木を1本だけ切るつもりが更地を作ったり、火を熾すつもりが山1つ消したりするなんて……縮地なんて高速移動じゃなくて瞬間移動だったし

それはともかく、ある程度は慣れた事だしそろそろ首都に戻って予定通り拳闘士を始めようかな。

〔奏side out〕

一月振りに訪れる首都に空から降り立つと以前よりも人が多い

「ちょっと尋ねたいんだが、今日は何かあるのか？以前訪れた時よりも人が多い気がするんだが」

「ん？ああ、この街の人間じゃないのか。今日は拳闘大会があるんだけど、そんなに規模が大きい訳じゃないから知らないのも無理はないか」

奏は側に居た熊の頭をした獣人に尋ねると一瞬怪訝な顔をされたもののすぐに教えてくれた。

「そうなのか、拳闘士として生計を立てようと思ってこの街に来たんだがちょうどよかったな。ところで、飛び入りで参加できるのか？」

「兄ちゃん拳闘士になるつもりなのか？まだ開始前だからギリギリまで飛び入りを受け付けてるはずだよ。出るんだったら応援するよ」

「そのつもりだ。教えてくれて助かったよ。
じゃあ、受付をするから失礼する」

「がんばれよ」

獣人の男の声に手を上げて答えると会場に向かって飛んだ。

会場に着くと入口には2つの列があり長い列の前方には一般客入場受付と書いてあるプレートがあり短い列の前方には当日予選参加者受付と書いてあるので短い列にの最後尾に並んだ。

奏の順番が回ってくると職員が説明を行う。

要約すると死んでも責任は取らない、最大2人で参加可能、飛び入り参加で本選に出れるのは1組だけ、当日予選は参加者全員でのバトルロワイヤル、これに納得できるなら契約書にサインして待合室で待機とのこと。

奏はさつさとサインすると係員の案内に付いていき待合室で出番までおとなしく待つ。

「大変お待たせしました。

これより、グラニクス拳闘大会フェンリル杯を開催します！

まずは当日予選参加者によるたった1つの本選出場枠をかけたバトルロワイヤルだー！」

際どい格好をした背中に翼、腰の辺りから尻尾の生えた女性がマイクを使って叫ぶ様に開会宣言をすると割れんばかりの歓声が観客席から湧き、同時に当日予選参加者が会場に入場する。

そろそろと入場する選手。

全員で100人前後だろうか、選手が出揃うと開会宣言を行った女性司会者が開始の合図を出す。

「総勢118名69組が出揃ったところで試合開始！」

その声を聞き一斉に動き出そうとする選手

しかし、奏も同時に動いており、いや、指1本動かす事なく技を放ち終えている。

開始直後に放たれた只一度の技で動き出そうとした奏以外の選手がその動きを地面への抱擁に変えた。

第2話（前書き）

久々に聖痕を読んだり仙人について調べたりしてたら、主人公だけでなくチートなんだよ

紅き翼クラスが雑兵として溢れる無理ゲーモードでも余裕で無双できるとかorz

第2話

静まりかえる会場

会場にいる全ての人が呼吸すらも忘れたかの様に舞台に視線を向ける。

誰もが言葉を忘れる異様な空間の中でドンと物が落ちる音と少し遅れて女性の声が響く

「つつ……いったあ……な、な、何が起こったんだー!?
あまりの事に私、飛ぶ事も忘れて落っこちてしまいましたー」

そう、最初の音は司会の女性があまりの光景に羽を動かすのを忘れ5 m程の高さから落ちたのだ。

『『『うおおおつつつ!!!!』』』

そして音を忘れた会場は司会者の言葉により爆音で満たされた。

爆音の原因は狂ったような音に顔を歪めて耳を押さえているのだが

……

だがそれもすぐに終わる。

司会者の言葉で波が引くように静かになる。

「えー、情報によりますと当日予選を圧倒的な力で勝ち抜いた選手は旧世界出身の神風奏選手のようです。」

それでは、インタビューしてみたいと思いますーす」

そう言つて奏に近寄る女性。

「本選進出おめでとうございまーす！

早速ですが、先程一瞬で予選通過を決めました、いったい何をしたんですか？

あと、できればフードを取ってもらえませんか？」

今まで語ることにはなかったが、奏はフード付きのローブを着ており顔が見えないようにすっぽりとフードで顔を隠している。

問われた奏はフードを下ろしながら答えようとし、2度目の爆音によりその声を遮られる。

ただし、今回は前と違い女性客による黄色い歓声だが

「なんとー！？ フードに隠された素顔の下はとんでもない美形だったー！」

これも今まで語る機会がなかったが、奏の容姿はスラリと背が高く、手足も長い、非力さを感じさせない力強さがあり、顔は、細く高い鼻、対面しただけで死を連想する様な狼に似た鋭い双眼、それだけで柔和な印象を与える穏やかな笑みを浮かべる口元。要するにイケメンである。

それも、イケメンの上に空前絶後や比類無き、と付けても問題ない様なイケメンである。

実はこの男、転生前も十分にイケメンだったのだが、中学卒業までは全校生徒が10人前後という田舎で育ち高校は男子校、そのため

女性に免疫がなく自分から無意識に避けていたせいで女性を寄せ付けず、自分の事をモテないと思っていた。

それ故に、神様に転生させられる際に見た目を良くして欲しいなんて言っただのである。

ちなみに神様もその辺りを理解しており、女性に対して普通に接する事ができるように弄っていたりする。

それはさておき、経緯はともかく女性に対して十分に免疫を無自覚に持つ事になった奏は女性のイケメン発言にありがとうとサラッと返し先の質問に答える。

「技に関しては詳しく説明できないが、何をしたかと言うと、舞台に立った者の全身の筋肉、骨、内臓に満遍なく衝撃を与えただけだ」

精霊との契約による行使ではなく、意思のみで精霊を従える精霊術の存在しない世界で精霊術の説明なんてできる訳もなく、起こした現象の説明だけに留める。

「旧世界に存在する魔法体系なのでしょうか？」

勝手に勘違いをした女性司会者に好都合と言わんばかりに言葉を返す。

「私の一族に伝わる秘術故に詳しく説明する事はできない、すまない」

この説明で司会者も観客も納得し追及を諦める。

「それでは、最後に本選にかける意気込みを語ってもらいましょう！」

「そうだな、決勝でジャック・ラカンと戦えるのを楽しみにしているよ」

「なんと、大胆にも決勝進出予告だあゝ！でも、そこに痺れる、憧れるっ！決勝まで行けるよう応援しています。それでは神風奏選手ありがとうございました！」

女性の言葉に再度沸く歓声を背中で受けながら奏は控え室へと戻って行く。

第2話（後書き）

本作ではアスナと紅き翼が初邂逅の際に主人公にアスナを奪還させようと思ってたんですが、それだと話が進まない事に気付いて慌ててストーリーを修正中orz

アスナがいらないなら完全なる世界の計画もオスティア崩落も起きないからなあ……どうしょ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9479x/>

魔法世界ネギま！～異端の精霊術師～

2011年10月31日07時16分発行